1歳半児の母親の育児に対する負担感と子どもに対する拒否感について

池田　由子（国立精神衛生研究所児童精神衛生部）
河野洋二郎（国立精神衛生研究所児童精神衛生部）

I　方　　法

1　目　　的

1歳半健診は対象児の発達をチェックすることのほかに，母親が適切な態度で子どもに接しているか否かを調べることを目的としている。それは，この時期が子どもの社会性の発達にとって，親のしつけが大切となる時期にあたるからである。

著者らの調査は，1歳半の子どもを持つ母親が，育児についてどのような意識を持っているか，また日頃どのような気持で子どもに接しているのかを知るために，特に育児に対する負担感や子どもに対する拒否感に焦点を置いて調べることを目的とする。

2　対象および調査時期

千葉県柏市の1歳半健診の対象児の母親を対象とし，昭和59年5月に予備調査を行ない，昭和59年6月と7月にこの調査を行なった。

3　調査方法および調査内容

調査は，1歳半健診の会場で母親に調査票を配布し，会場内で記入させ回収した。調査票は，大部分が選択項目からなるアンケート方式をとった。内容の概略は，以下のようなものである。①生下時体重と出生時の異常の有無　②母親の出産および育児観　③生育歴上の子どもの問題の有無　④育児環境について　⑤育児に対する負担感や子どもに対する拒否感　⑥母親の身体また精神的不適応感[注1]　⑦母親の年齢・職業・家族形態など[注2]。

注1）この質問項目は，国立精神衛生研究所児童精神衛生部で，昭和56年度健康づくり特別研究委託費による「家庭婦人の精神衛生対策に関する研究」のため作製したものである[1~3]。

注2）調査票の具体的な内容については，紙数の都合で結果に関する図表に一部を掲載するにとどめた。

II　結　　果

1　対象者数と回収率

調査は健診に来所したすべての母親を対象としたが，配布もれおよび未記入や誤記入を除くと表1のようであった。回収率は90.47％と高く，その理由は回答が選択枝によるため容易だったこと，記入と回収が会場で同時に行なわれたためと思われる。

2　母親にとって子育ての意味

図1に示すような質問項目により，母親の出産および育児に対する意識を調べた。「子どもを育て，その成長を見守るのは喜びである」と回答したものが80％近くもあり最も高い。また，「次の社会をになう世代をつくる」（27.6％）や「家や自分たちの後つぎを育てる」（17.1％）という項目を選ぶ母親は比較的少なかった。

3　育児環境について

子どもの遊び場，遊び仲間，医療機関の整備，育児の相談相手や援助してくれる人の有無について調査したところ，図2・3のようであった。子どもを預ってくれる隣人の有無に関する項目と「いま住んでいる家や場所は，子どもを育てるのに良い環境ですか」との環境の満足度を調べる項目が約70％程度であった以外は，どの項目も80％を超えた。

4　育児に対する負担感と子どもに対する拒否感

結果は図4・5に示した。これらの項目は，因子分析によって第1因子と第2因子に因子負荷の高い項目（因子負荷率0.4以上）を選び，それぞれ負担感また拒否感と名称を与えたものである。

負担感については，「ときどきある」と答えたものも含めると，「育児から解放されたい」（70.8％），「体が

疲れやすく子どもを育てるのがつらい」(45.2％)が高率で目立つ。また,「働いている女性がうらやましいと思う」(51.2％),「仕事と子育てを両立させるのが難しいと感じる」(67.8％)といった母親の職業と関係する項目が高率であった。しかし,「子どもの身のまわりのことをするのが面倒くさい」(9.9％)と思う母親は少ない。

拒否感については,「しつけや育て方に自信がない」(59.6％),「いたずらや聞きわけの悪さに,とても腹が立つ」(63.8％),「ひどくぶったり叱ったりしてしまうことがある」(52.9％)と答えた母親が半数を超えた。しかし,「育てにくい子だと思う」(21.5％),「性格が,いやだと思う」(16.9％)と,子どもに対して直接的な拒否感情を抱くものは比較的少なかった。

4　負担感・拒否感と他の項目の関係

環境に関する7つの質問項目,生育歴にみられる子どもの問題(12項目),身体また精神的な不適応感(30項目)をそれぞれ環境に対する満足度,生育歴の問題点,SRT(Symptom-Rating-Test)得点として点数化し,負担感と拒否感との相関を求めたところ互いに高い相関が認められた。

負担感に高い得点を示したものは,環境に対する満足度が低く,子どもの問題も多く,心身的な不適応感が高い結果が得られた。拒否感が高い得点のものは,子どもの問題が多く,心身的な不適応感が高いが,環境に対する満足度とは関連が認められなかった。拒否感は母親の年齢と相関があり,年齢が若いほど拒否感の得点が高い傾向があった。

5　身体また精神的不適応感(SRT得点)

身体また精神的不適応感に関するSRT得点の平均値は8.91(SD＝0.361)であった。国立精神衛生研究所で婦人3,374名を対象として調査した結果では平均値9.79(SD＝8.48)であり,この結果と比較すると今回の調査対象の母親は心身の不適応感の訴えはそれほど高くないと言える。

6　生下時体重

出生時の体重は平均3161.1ｇで,2500ｇ未満の子どもが23名いたが,生下時体重と育児に対する負担感や子どもに対する拒否感には意味のある関連は認められなかった。

7　母親の年齢および職業,家族形態

母親の年齢は19歳から43歳で,平均年齢は30.3歳であった。職業は,85.3％が専業主婦で,常勤者は6.6％であり,残り8.1％がパートや自営業や農業であった。家族形態は79.6％が核家族,18.2％が祖父母などとの同居による拡大家族,2.2％が母子家庭やその他の家族形態であった。

Ⅲ　考　　察

結果は,調査方法の限界から1歳半児の母親の意識を十分にとらえたものでなく,負担感や拒否感についても内容の具体性や実態の詳細に欠けるきらいがあった。しかし,この年齢の子を持つ母親の育児観や日常の育児の概況を,把握することができたように思える。

結果から受ける第一の印象は,多くの母親が育児や子どもの成長に喜びを感じ,育児を肯定的にとらえている点だろう。図1に示した質問項目は,総理府青少年対策本部の「国際比較――日本の子どもと母親」(昭和55年)で用いられた項目を含んでいる。総理府の調査では,「次の社会の世代をつくる」は61.7％で最も高く,「子どもを育てるのは楽しい」は20.6％であった。調査方法に若干の違いはあるが,今回対象となった1歳半児の母親は,総理府の報告とは非常に異なり,育児を自分自身の喜びとしてとらえている。しかし,反面では育児に対する負担感は高い。乳幼児期の育児による疲労感は,産業労働と比較しても高く,慢性的で夜勤型の疲労感と類似しているといわれる[4)]。多くの母親が「育児から解放されたい」,「体が疲れやすく子どもを育てるのがつらい」と訴えるのは当然であろう。また,「子どもの身のまわりのことをするのが面倒」と思う母親は少なく,母親のほとんどが心身の負担を感じつつも,育児を生きがいとし手抜きすることなく日々の子育てにはげんでいる様子がうかがえる。しかし,ときどきあると答えたものも含めると「自分が育児ノイローゼ気味だと思う」との回答が36.7％あり,精神的な健康に危惧を抱くものが少なくない。育児に対する負担感は,母親の環境への不満や子どもの発育の遅れや食事・睡眠の異常など子どもの問題と関連が深く,このような外因が強まれば,ノイローゼに対する危惧が現実のものとなることが予想される。

子どもに対する拒否感は,感情的な拒否は少ないが,体罰や強い叱責をするものは多い。1歳半という年齢は,自立への方向に進みはじめたとはいえ,言語能力は善悪の判断がつくほど高くない。この時期に質問のような強い体罰や叱責をする母親が意外に多いことに驚かされる。子どもに対する拒否感は,環境に対する

不満とは関連がなく，母親の年齢が若いほど高いことを考えると，母親自身の個別的な問題に帰するところが大きいといえる。児童の虐待や拒否の問題が増加しつつあるといわれる現在，母親の子どもに対する拒否感は重要なチェック・ポイントといえるが，現在の乳幼児健診では，母親の性格や資質まで把握することは困難であり，今後の課題といえる。

参考文献

1）池田由子・他：「第一報　質問紙法による問題家庭主婦と一般家庭主婦の比較について」．昭和57年度．家庭婦人の精神衛生対策に関する研究報告．

2）池田由子・他：「第二部　家庭婦人の年齢と精神衛生」．昭和58年度　家庭婦人の精神衛生対策に関する研究報告書．

3）池田由子・他：「子どもに問題があるときの父親と母親の精神衛生の比較について」．昭和59年度　家庭婦人の精神衛生対策に関する研究報告書．

4）佐々木保行・他：「育児ノイローゼ」．昭和57年，有斐閣新書．

表1　対象者数と有効回答数

有効回答数	健診来所者数（健診対象児数）
456名	504名　（　611名　）

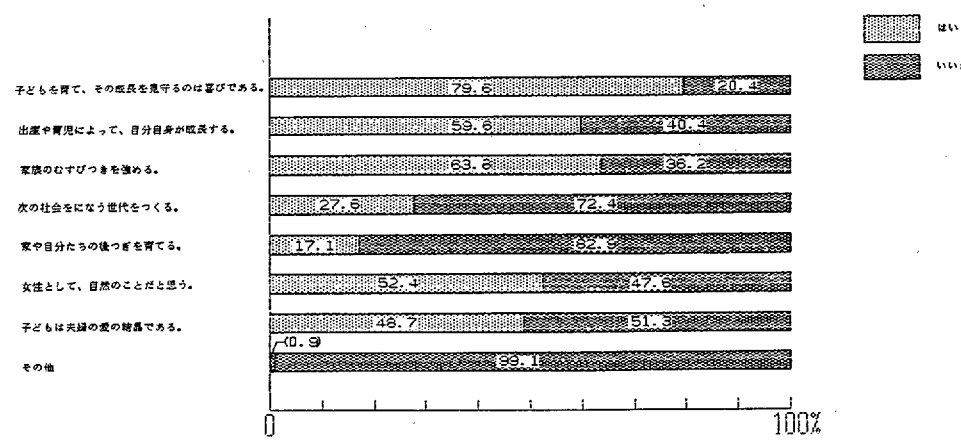

図1　母親にとって出産・育児の意義

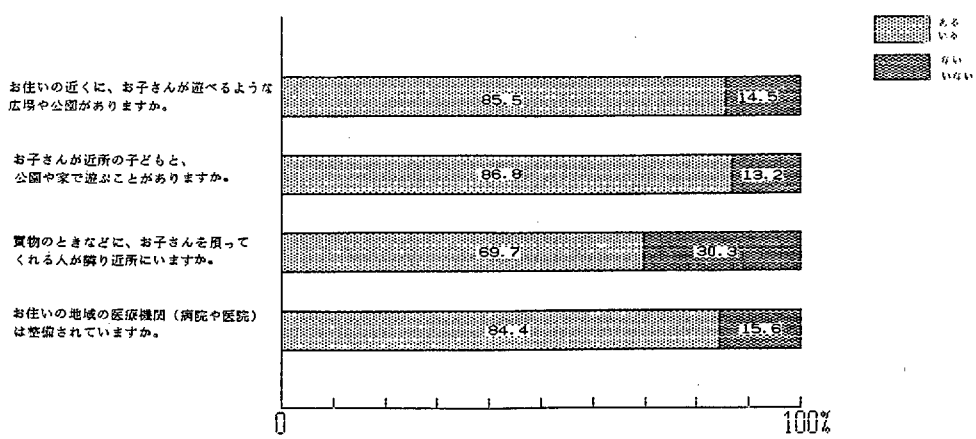

図2　育児環境について（1）

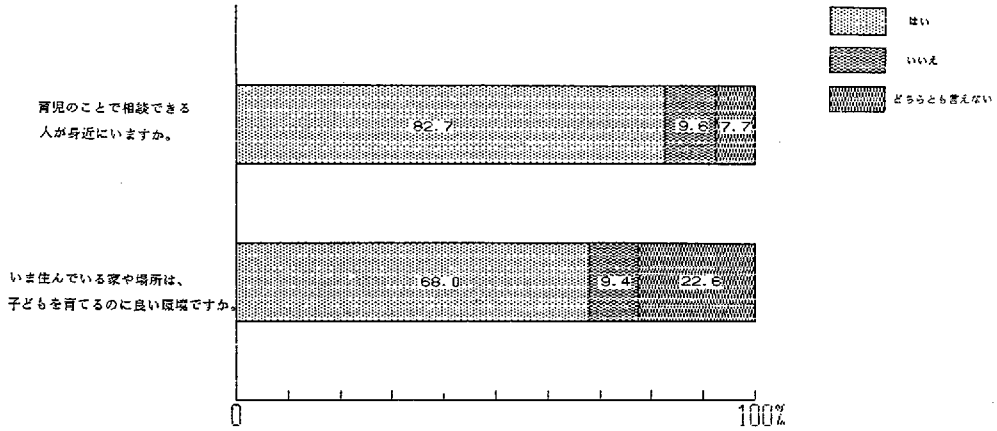

図3　育児環境について (2)

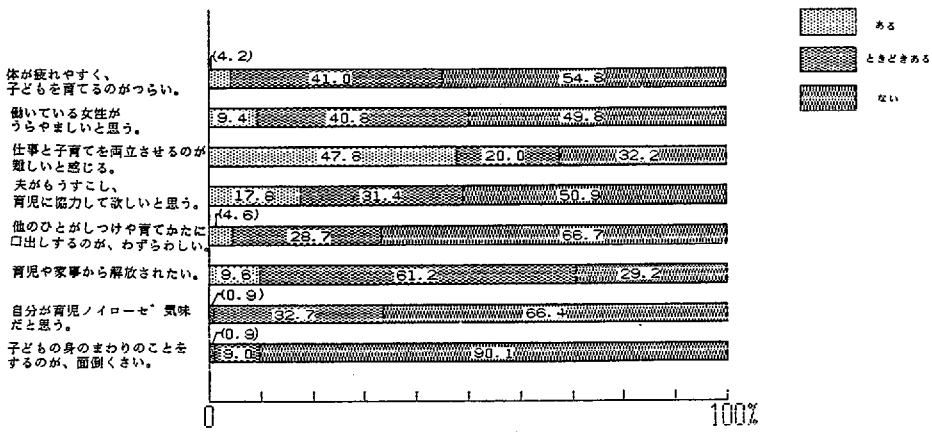

図4　育児に対する負担感

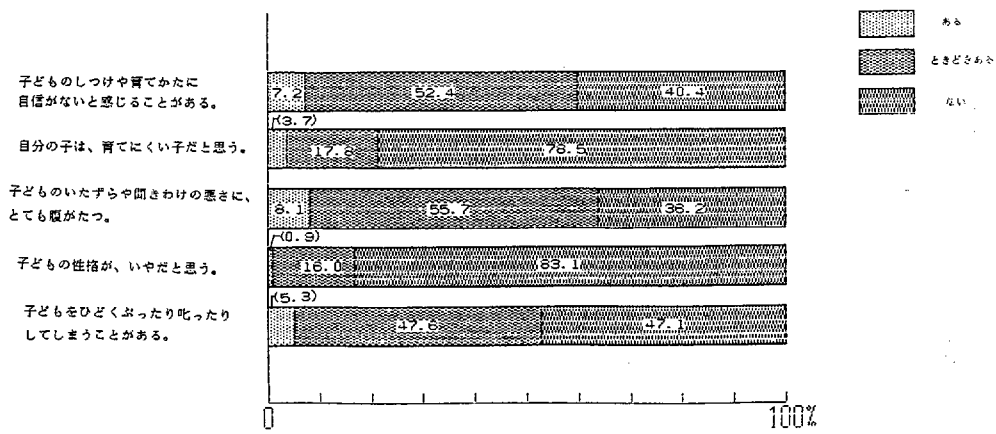

図5　子どもに対する拒否感

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1 方法 1 目的

1 歳半健診は対象児の発達をチェックすることのほかに,母親が適切な態度で子どもに接しているか否かを調べることを目的としている。それは,この時期が子どもの社会性の発達にとって,親のしつけが大切となる時期にあたるからである。

著者らの調査は,1 歳半の子どもを持つ母親が,育児についてどのような意識を持っているか,また日頃どのような気持で子どもに接しているのかを知るために,特に育児に対する負担感や子どもに対する拒否感に焦点を置いて調べることを目的とする。